

「日中植林・植樹国際連帯事業」中国住宅建築分野環境防災訪日代表团 参加者の感想（抜粋）

○ 環境関連：環境に配慮した建設や環境保護に対する意識が非常に強く、長期間にわたって対策に取り組んでいる。実行力が高く、監督・管理も厳格だ。こうした姿勢によって、日本は環境分野において著しい実績を残し、美しい環境を保っている。我々も日本に学び、よく考えるべきだ。

防災関連：日本は環太平洋地震帯のプレートが集中している場所に位置し、地震と津波に頻繁に襲われている。そのため、建設の分野においても防災システムの完備を追求し、効率の良いガイドライン的な役割を果たすものを整備している。また、日本人は防災意識が高く、きちんとそれを実行に移している。

省エネ関連：日本は、省エネと環境保護の対策をととても重視しており、政府は政策面から省エネへの取り組みをサポートしている。つまり、エネルギー消費を制限すること、エネルギー浪費をなくすこと、二酸化炭素の排出削減で収益を得られるような取り組みを行っている。

植樹関連：植樹事業の長期的計画を確定し、計画の完成予想図を設計している。さらに植樹する位置や木の種類を明確に決め、その保護と管理を強化している。我々もこれに学ぶべきだ。

交流について：日本側のスタッフは真面目で責任感が強く、何事も周到に準備して臨んでおり、仕事は計画どおりに実行する。日本人は礼儀正しく、礼節をもって相手をもてなし、進んで人助けをする。

○ 南三陸町の復興再建に向けた活動が強く印象に残っている。住民参画の度合いが高く、政府も根気強く取り組みを指導しており、それが復興再建のための優れた理念や緻密で的確なプロセスの実行につながっている。中国と日本はいずれも地震の多発地帯に位置している。大災害に遭ったとき、政府が復興再建を統括するという点は両国とも基本的に一致している。違うところは、中国の場合、地域コミュニティのレベルの復興への住民参画の度合いが低く、再建計画は科学的なのに合理性に欠くという現象が出てきてしまうことだ。その結果、住民が地域コミュニティの取り組みを受け入れようとする気持ちが低くなってしまふ。このほか、中国の復興再建は、細やかさの点でもまだ日本から学ぶ必要がある。地域コミュニティの文化、継続的な経済活動というのは、ある程度の具体策を検討してこそ生まれるものだ。

○ 私たちをアテンドしてくれた3名のスタッフは気配りが細やかで責任感にあふれていた。特にZさんは、日本人や日本文化について、たくさん解説してくれた。プログラムの手配も素晴らしく、技術交流や参観を通して理解を深めることができた。印象に残っていることが多すぎる。日本や日本文化への理解が毎日更新されていった。代表的なものを次に挙げる。

(1) 日本人の防災意識。日本では小学校から子どもたちに防災意識を持つよう教育している。防災センターを設立して市民に防災演習の機会を与えていたが、これは非常に重要なことだと思う。中国で私が経験した二度の地震では、すぐにどう対応すべきか判断できた人はほとんどおらず、私たちは教室で着席したまま、先生が何か情報を聞いてくるのを待っていた。今回の日本訪問で、自然の力への畏怖の気持ちが一層深まり、防災とセルフレスキューの重要性を強く感じた。津波の映像を見ていると、とても辛く、胸が痛む。当時も防災面で日本は比較的進んでいたのに、それでも災害の被害を食い止めることができなかった。我々には防災について考えるべきことがまだまだたくさんある。

(2) 日本の礼儀。日本は、発展を遂げると同時に伝統文化も残している。これは急速に発展している中国もぜひ参考にする必要がある。日本は欧米の技術から学び、東方の礼儀や謙虚な文化も維持している。中国は礼儀の国だ。経済発展によって伝統文化が失われるようなことはあってはならない。

(3) 環境保護の意識。私が最も驚いたのは、日本のゴミの分別の厳しさだ。Zさんからペットボトルはすべてきれいに洗い、牛乳パックは切り開いて捨てるという説明を聞いたとき、本当にショックを受けた。すべての国民が強い環境保護の意識を持っていなければ、このように手間と時間を費やして、進んで分別を行うことはできない。中国のゴミの埋め立て地のことを考えると、

心が痛んだ。知識人として、ゴミをどう分別するべきかすらよく知らなかったことを、とても恥ずかしく思う。これからは、まず私からゴミを分別して捨てようと思う。共に美しいふるさとを作りましょう！

(4) 日本の現代建築。建築士として、日本の建築物は素晴らしいと思った。とりわけ、隈研吾さんが設計した南三陸町の商店街には、細部にいたるまで感動させられた。あのようなディテールの追求は、日本の文化に由来するものかもしれない。中国と違って、日本では何事も早めに準備し、厳しくタイムスケジュールどおりに進行する。こうした緻密な姿勢には脱帽する。

○ 良かった点：(1) 日本では政府や国民が自然災害への備えをととても重視していると感じた。(2) 日本人の社交マナーに私たちも学ぶべきだ。(3) 省エネや環境保護の意識も見習うべきだ。

今回の訪問は、私に強い印象を残した。特に日本社会のオペレーション管理だ。政府の機関から、小さな商店にいたるまで、その厳しく、真剣な仕事の仕方を見て、日本人という民族に対する理解がより深まった。大自然の前では、人は小さく弱い存在だ。しかし、今回の訪問を通して、東日本大震災の津波のあと、被災地の再建の過程で、日本人は冷静で秩序あるその特性を存分に発揮していたことがわかった。日本の政府と国民は、堤防を再建し、家屋を移転させ、災害に遭った経験を十分に活かして統制のとれた復興作業を行った。正常な社会の営みを保証すること。これは中国人も学び、参考にすべきところである。

今回、北電興業を視察して、建築における省エネ対策について認識を新たにした。中国では、主に建築物の外壁を改造するなどしてエネルギーの消耗を軽減している。この方法では必然的に先行投資の金額が増えてしまう。一方、北電興業では日頃の操業状況をデータ管理することで潜在的な省エネ効果を掘り起こしており、省エネ・二酸化炭素の排出量削減のための新たな道を切り開いていた。私たちがこれから省エネ都市を作っていくうえで、有益な見本を示してくれたと思う。

○ 私は建築構造設計士という職業柄、これまで数多くの建築プロジェクトで設計を手がけてきた。今回の日本訪問で印象的だったのは次の点だ。

(1) 日本鋼構造協会への訪問を通して、日本では鋼構造が広く普及していることがわかった。とりわけ、鋼構造建築の着工面積が鉄筋コンクリート(RC)構造のそれを超えているというのは、中国の状況と大きく異なるところだ。特に、中国では鉄骨・鉄筋コンクリート構造(SRC)の建築が流行っているが、日本ではほとんど見かけず、鋼管コンクリート構造がそれに取って代わっている。鋼構造の分野で日本は中国の先を走っており、中国の同建築の発展の参考にすることができそうだ。

(2) 東日本大震災以降、日本は大震災後の再建と、将来また津波に襲われたときの防備策のために数多くの取り組みを行ってきた。段階的に対策を講じていくことで、津波が人々や財産に損失を与えることを防いでいる。中国の近海で津波が発生することは少ないが、冠水は時々発生している。「新型城鎮市化建設」(中国政府が推進する新しい都市農村の近代化建設政策)を進める上で遭遇するいくつかの問題に、今回の訪問は答えを提示してくれた。

(3) これまで設計してきたプロジェクトも、耐震性の要求に応じて作ってきたが、私には大型の地震に遭遇した経験が一度もない。札幌市民防災センターを訪れたとき、大地震に見舞われたときの恐れ慌てふためく気持ちを体験し、建築構造全体における部材の連結の重要性と、構造設計士の責任の重さを感じた。

